

巻末報告

2023 Annual Conference on Curriculum and Pedagogy
in East Asia (2023 ACCPEA)
2023年東アジア学校カリキュラムと教授法研究大会報告書

創価大学

鈴木 詞雄 董 芳勝

1. 研究大会の経緯

東アジア学校カリキュラムと教授法研究大会（ACCPEA）は、中国の首都師範大学初等教育研究所と創価大学教育学部・教職大学院との交流から始まり、後に首都師範大学初等教育研究所と創価大学教育学会との共催で行ってきた研究大会である。

研究大会の主旨は、東アジアの哲学、言語文化、歴史及び各地域の民族文化をもとに、教科教育、学校教育、教育理論と実践、教育技術、教育測量と評価等の教育領域の各々の課題を先進的に研鑽していくことを目指し、2019年から毎年1回、計4回の研究大会を、日本と中国で開催してきた。各回の研究大会には、中日両国の初等教育研究者、初等教育の実践者、教師教育の研究者等多くの方が参加し、中日の教育交流において大きな成果を上げてきた。

2023年度からは東アジアの特色ある学校カリキュラムと教授法の理論をより洗練するため、年1回の研究大会を開催するだけでなく、初等教育の実践者の小規模的な実践交流や検討会を行うようにその在り方を改めた。中日両国の初等教育が直面している課題に焦点を当て、中日両国の小学校教師によるオンライン実践交流を2回行った上で、10月13日に中国で行われた研究発表会を2023ACCPEAと位置付け、鈴木・董の両名が参加した。

2. 研究主題

2022年より実施された中国の新しい『义务教育数学课程标准（義務教育数学学習指導要領）』で、数学科の学習は児童の生活上の問題と結び付ける授業の在り方を求めている。そのため、児童が日々接している社会生活や児童の発達特徴、情報機器等の様々な側面から学習内容や学習環境を整えるなどの取組がなされている。

しかし、これまでの数学科の授業では、児童の学習内容の理解や計算能力の育成等に教師が重きを置くことが多く、数学の学習に対する児童の思いや学習態度、また児童がどのように認識しているのかという児童の内面の状況などについての配慮は十分ではなかった。このような数学科の授業では、新しい学習指導で求められている児童の数学的な見方・考え方を育むことは難しい。

そのため、2023ACCPEAの交流活動の一環として、中国の新しい学習指導要領の考え方をどのように具体的に実践していくのか、または児童の数学的な見方・考え方を育てていくのかを、マカオ地区に臨し教育実践区である珠海市首都師範大学附属小学校の横琴伯牙小学校と二期小学校で実践交流をし、その検討を行うことにした。

3. 参加者

珠海市と横琴広東・マカオ綿密協力区の第一線の教師を中心に、全中国から、初等教育の研究者やその実践者、小学校教科のカリキュラムと教育の研究者やその実践者、小学校教師教育の研究者やその実践者など、約200名が参加した。日本からは鈴木・董の両名が参加した。

4. プログラム

月 日	時 間	内 容	担当者	場 所
10月12日	9:00-17:00	受付	張玲	1階ホール
10月13日	8:10-8:30	開会式	劉淨	ホール
	8:40-9:20	授業1：第4学年上 《平行四辺形の面積》	北京市小 馮娜	
	9:35-10:15	授業2：第4学年上 《速度、時間、距離》	子期小 郝佳麗	
	10:40-11:20	授業検討：中日のシンポジストによる授業1・2 についての検討	程曉紅	
	11:30-12:00	講演1：日本の学習指導要領が目指す資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」	創価大 鈴木詞雄	
	14:00-14:40	授業3：第3学年上 《三角形の回転》	マカオ小 李凱勤	
	14:50-15:30	授業4：第3学年上 《倍の認識》	伯牙小 王淨	
	15:35-15:55	ビデオ鑑賞：伯牙小学校、子期小学校の紹介	段子格 欧海城	
	16:00-16:30	授業検討：中日のシンポジストによる授業3・4 についての検討	程曉紅	
	16:40-17:10	講義2：首都師範大学における具身式の授業実践研究	首都師範大 鄧舒竹	
17:10-17:20	閉会式・記念写真	劉淨		

5. 教師（授業者）の視点から見た授業の変化（首都師範大学附属小学校 HP より一部抜粋）

2022年版の義務教育数学学習指導要領の公布以来、多くの現場の教師は、児童の実生活に根差した学習状況づくりと問題発見できる授業の工夫に悩んでいる。児童の深い学習や問題発見力、思考力の向上には、そういった授業づくりの工夫が欠かせず、ますます大切になることを多くの教師は認識している。また、情報技術の適切な使用は、その学習に一定の効果をもたらすし、教育評価の一貫性をよりよく達成することができるとも考えている。そのために、教育現場での様々な試行錯誤の取組が生まれている。

現在、そのような試行錯誤から、授業のよい雰囲気づくりや、現在の実社会に直結している取組、児童の対人スキルとコミュニケーションスキルの向上等の取組への評価が高まっている。それらの取組を、教育現場の教師たちが、積極的に探究し、実践することで、授業のあり方が変わり、授業に対する理解も変わってきている。そしてこのような取組は、教師たちの今までの授業観を見直す機会となり、児童の主体的な授業づくりを工夫しようという動機にも

なっている。

授業1を行った北京市順義区光明小学校の馮娜 (Feng Na) 氏は、「授業では、学習と児童の具体的な活動が一体となり、児童が団結し、協力し、自分たちの思った課題を遂げ、自分たちのつくりたいものをつくり、授業の主人になった」と語った。また、「そういった授業の中で、児童は自分の想像力を発揮し、考え、動き、生き生きとした言葉の交流で学習活動を進め、学習内容を深めていく。授業は児童たちの望むものになっており、教師が行うものがないような授業となった」とも語った。

授業2を行った首都師範大学附属横琴子期実験小学校の郝佳麗 (Hao Jiali) 氏は、具体化された学習場面では、教師が舞台上から舞台裏に行き、児童は体の動きや感覚刺激を通じて概念をよりよく理解し、学んだことをよりよく活用できると語った。



授業1 《平行四辺形の面積》



授業2 《速度、時間、距離》

授業3を行ったマカオ埔慶中等学校の李凱欽氏は、「教育を体験学習に変えるという設計において、教師は児童がグループで協力して質問し、問題を解決できるように指導することに注意を払っている」と語った。そして「児童が真に数学を学び、数学を好きになれるように、児童の経験と組み合わせて抽象的な数学的概念を具体化する活動を設計している」とも語った。

授業4を行った首都師範大学附属横琴伯牙小学校の王靖 (Wang Jing) 氏は、「『倍』から関係性を見ると、教えることを学習に変える授業、体験学習が大切であり、教師の焦点は児童の問題の生成にある」と語った。また、「児童が自主的に問題を解決できるように組織し、様々な能力を協調的に発達させる」とも語った。



授業3 《三角形の回転》



授業4 《倍の認識》

6. 児童から見た授業の変化（首都師範大学附属小学校 HP より一部抜粋）

伯牙小学校と子期小学校の「教えから学びへの転換」の提案は、児童が授業の主人になることを具体的に具体化する新しいカリキュラム改革の要件をよりよく実施することであり、授業を児童のコアリテラシー開発の主役にするための重要な方法であった。この変化の過程で、最も恩恵を受けるのは児童であり、児童は自分自身が変わり、授業も変化していることを目の当たりにするとしている。以下は、今回の授業を体験した児童の感想である。

児童 A（子期小学校4年）：この授業は、先生が課題リストを出してくれて、まず自主的に考えて、グループで話し合っ、結果を書いたり言ったりして、グループディスカッションの結果をクラス全体で共有するという、これまでの授業とは大きく違うと思います。とても好きです！

児童 B（同上）：この授業は活気に満ちていて、児童は質問に答えるときに自分の考えを言葉や行動で表現し、児童同士の交流が増え、速度という言葉を深く理解することができました。

児童 C（伯牙小学校3年）：今回の授業で、数学の学習について新しい理解を得ることができました。李先生から幾何学的な棒を使って様々な三角形を作ってほしいと言われ、とても楽しいと思いました。作り終わってから時間が経つと、三角形の長辺は短辺2つを合わせたよりも長くなければいけないこともわかりました！

児童 D（同上）：この授業は私にとって非常に斬新で、授業では iPad を使って質問に答え、先生はすぐに私たちの答えを画面に表示することができました。一番面白かったのは、クラス全員が慌てて質問に答える姿で、とてもワクワクしました。

7. 専門家の視点から見た授業の変遷（首都師範大学附属小学校 HP より一部抜粋）

新教育課程の改革以降、数学の授業は、ゲーム体験、学習事例、プロジェクトなど、さまざまな形で授業が行われている。今回の授業は、新しい学習指導要領の探求と実施であった。



中日のシンポジストによる授業検討

鈴木は、「何人かの教師が児童の数学的な見方・考え方の育成に注意を払い、授業設計はスモールステップを反映していた。その上で、児童の変化に注意を払い、教師は児童の言葉で授業を創れるファシリテーターであってほしい」と訴えた。

李凱琴氏は、「情報技術を使って児童がゲームを通して学習を学べるようにし、退屈な数学

の授業を面白くできている。Wang Jing 先生の授業は非常に多様で、児童がノンストップで数学の謎を探求していた。」と述べた。

マカオの Pui Ching Middle School の副校長 Chan King Lian 氏は、「以前、授業は教師のためのショータイムだったが、今は教師と児童のショーケースになっている。教師は児童を全面的に信頼し、児童に十分に考えさせ、自分の質問に対する答えを見つけさせ、学習する目的を可視化する必要がある」と述べた。

首都師範大学初等教育研究所所長の郜舒竹 (Gao Shuzhu) 氏は、講演の中で『『教えを学びに変える－具現された学習』では、学びにおける自主性を、児童が十分に発揮できるようにするため、児童を学びに没頭させるためのタスク型の豊かな活動を教師が設計する必要があるが、今回の研究会で実践された授業において、何人かの教師がそれを達成していた』と強調した。

8. まとめ

本年度の2回のオンライン交流と今回の訪問交流を通じて印象に残った授業の変化は、中国の教師が児童に対して必要以上に説明しなくなったことである。郜舒竹 (Gao Shuzhu) 氏の「教えから学びへの転換」という主張はコロナ禍以前より聞いていたし、世界共通の認識でもあると感じていた。しかし、コロナ禍以前に私が参観した授業において、中国の小学校教師が「教えから学びへの転換」を十分体現しているとは言い難い状況があった。しかし、本年度参観した授業はどの授業も「教えから学びへの転換」を体現した授業であったり、その片鱗を覗かせる授業であったりした。その要因の1つは、郜氏が『義務教育数学学習指導要領』を作成している1人であるということが大きいだろう。加えて、首都師範大学附属小学校の教師が不安を抱きながらも自らの教育観を変換させつつあることが挙げられる。具体的には、以下の5点等が挙げられる。

- ①教える (説明する) ことを最小限と位置付け、児童の言葉で授業を進めようとしている。
- ②操作活動などの学習活動を位置付け、児童が主体的に学習を進められるようにしている。
- ③「if not ~」という条件変更を教材に入れ、児童の数学的な見方・考え方を育てようとしている。
- ④児童に振り返りを行わせ、児童が自らの学びを客観的に捉えられるようにしている。
- ⑤操作活動等のアナログな活動と、タブレット端末等を使用したハイテクな活動を組み合わせ、現代ならではの授業を展開しようとしている。

鈴木は講演で「日本の学習指導要領が目指す資質・能力を育む『主体的・対話的で深い学び』』について話し、中日両国が目指す教育目標や授業の在り方が非常に似通っていることも提示した (図1)。

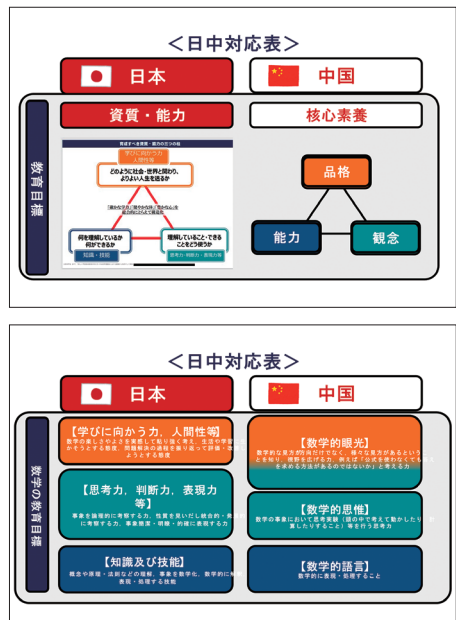


図1 鈴木・岩間・星原・董・長島 (2022) 教育目標の日中対応表

来年度も引き続き研究交流を行い、中日の教師を育成する一助になることを期待したい。

【引用・参考資料】

鈴木詞雄・岩間愛智・星原律・董芳勝・長島明純（2022）「中日両国の教育の認識に関する比較研究—数学科「同課異講」を通して—」『中日教育研究学会 2022 年研究大会』中日教育研究学会

珠海市首都師範大学附属横琴伯牙小学校 HP（閲覧日：2023年11月22日）

https://mp.weixin.qq.com/s?__biz=MzkwMjEyMzQyNQ==&mid=2247500553&idx=1&sn=1aa6fe62d2f4ac3ec5bead6a5e068bf9&chksm=c0a8d9c7f7df50d1728bc848c4ecfce8703fc58595a662b4f64e50a52cf617646fdc4f96187&mpshare=1&scene=1&srcid=1022AIC1njpe1SVnc9Nacu0v&sharer_shareinfo=400ac61a9b748dbd4bfb6749ce2aa4fc&sharer_shareinfo_first=400ac61a9b748dbd4bfb6749ce2aa4fc#rd